

第2章 信仰 ～祈りのかたち～

1 下屋敷神明社跡(寺井町)

伝承では、寺井山の奥にあった祠を十村牧野家が屋敷神として、館の前庭に移して崇敬していたとされます。加賀藩主が鷹狩りで立ち寄った際には参拝を欠かさなかったそうです。



2 少彦名大神鎮座地(粟生町)

祭神は少彦名大神です。古記録は火災で失われ、詳細は不明ですが、元は薬師宮と称され、医薬の仏である薬師如来と同体と信じられてきました。境内には「イボ観音様」と称される小祠や、薬効のある保寿泉跡があります。

3 八幡神社由緒碑(筋生町) 平成13年建立

明治40年(1907)の明治政府の神社合併促進による行政指導を受け、筋生の3社が合併して八幡神社となりました。祭神は応神天皇・神功皇后・比咩大神・菅原大神とし、同43年(1910)に社号を菅原神社にしたい旨を願い出ましたが叶わず、有志が菅原神社の石碑を寄進しています。その後、平成13年(2001)に現在の「八幡神社」の社標に建て替えられました。



4 旧宮趾(福岡町) 昭和61年建立

石清水八幡宮御料田があったので、八幡社を勧請したと伝えられます。慶応3年(1867)に正八幡大神の神璽を受け合祀し、明治6年(1873)に村社に列格しました。同35年(1902)に境内より出土した聖観音菩薩像を社宝としています。碑は「遷宮八十年」と刻してあります。





5 旧神殿跡地(大成町) 昭和57年建立

野・印内に2座、重住・濁池に1座があり、北陸本線寺井駅の開設で、駅建設予定地の真ん前に鎮座していた濁池の神社は野の神社と合祀、印内、重住のご神体は野の神社に遷座され、これらの神社は昭和31年(1956)に統合されました。同57年(1982)の新社殿造営の大事業が成り、直前には旧神殿跡の除幕式が厳修されました。碑石は手取川独特の白鉢巻石を使用しています。

6 釜屋龍王権現社由来(中町)

宝暦3年(1753)に越前から移住した中釜屋・本釜屋・次郎兵衛釜屋・浜村が龍神で海の守り神として建立、場所は海岸線の松林の中でした。海上鎮護・万民守護の神として崇拝されました。明治末期に風雪の被害のため本成寺に移りましたが、昭和49年(1974)より現在地となっています。



7 石川県十名所碑(末寺町) 昭和4年建立

新愛知新聞(現在の中日新聞)が、昭和2年(1927)に中部日本各府県新十名所選定事業を行うことを提唱し、同4年(1929)に福井・石川両県の新十名所を選定しました。その中に末寺の白髭神社が選ばれました。山頂の境内から白山を望むことができます。

コラム「能美市の狛犬」

8 奥野八幡神社狛犬(寺井町)

9 狭野神社狛犬(佐野町)

10 蟻宮石子神社狛犬(石子町)

能美市・川北町には神社が84社あり、狛犬が274体あります。最古の狛犬は狭野神社・奥野八幡神社・蟻宮石子神社の狛犬であり、狭野神社のものは文久2年(1862)、奥野八幡神社のものは同3年(1863)の記録もあります。蟻宮石子神社の狛犬も形態が類似しており、円座に置かれているなどの共通点があります。



11 弘法様の水(灯台笹町)

幕末から明治にかけて度々伝染病が流行しました。谷川から流れる生活用水で伝染病が蔓延していることが分かり、村の名士の発案で上流の湧水を直接導水することにしました。伝染病を鎮めた伝説がある弘法大師の祠を水汲み場に建て、伝染病の鎮静を祈願しました。現在、水は流れていません。

12 またんごんの清水(下開発町)

「またんごん」とは集落の中洋一宅の屋号のこと、下開発は集落の名字が東・西・南・北・中、そのため屋号で呼ぶのが普通で、洋一宅の東隣・中庄一宅が「しょうでんさ」、その東隣・中正章宅が「あたっしゃ」で、この三軒とも「しょうず(清水・生水)」の家として誰もが認めています。昔の面影は薄れたとはいえ、川戸(こうど=洗い場)跡や日月の祠(ほこら)が残っています。



13 大正水(坪野町) 大正12年建立



坪野神社前から大口境までを「大口坂」といっていますが、大正時代、村道を拓けるといって、現在の県道のもとになる道幅を荷馬車が通れるほどに拓ける工事が行われ、ここに清水が湧き出し、以後、坂を行き来する人の憩いの場となり、「大正水」と呼んでいます。そして道ができた記念に石地藏を祀っています。

14 水無谷(みんなしたん)の清水(しょうず) (鍋谷町)

昔、泰澄大師が観音山にお堂を建てるため、弟子のお辰行者を観音山に向かわせました。このとき鍋谷の人びとはきれいな水がなく困っており、行者が白山権現に水乞いをして水晶のようなきれいな水を湧き出させました。きびしい夏でも清水は涸れることがなく、村人は行者の功德をしのんで「みんなしたんのしょうず」と呼んでいました。



15 遣水観音霊水(仏大寺町) 昭和11年建立



遣水観音山霊水堂は遣水山観音堂への登り口に 있습니다。白山信仰にかかわる遣水山観音堂は、近代まで女人禁制が保持されてきた霊地で、観音堂に安置されていた木造十一面観音像は泰澄ゆかりのものでした。周辺の村人だけでなく、舟人たちは遠くこの山を航路の目印として安全を願い信仰したと伝えられています。山腹の観音堂と十一面観音像は平成5年(1993)に焼失し、現在は仮堂が再建されています。

16 聖観世音菩薩出現跡(福岡町) 昭和56年建立

17 聖観世音菩薩像御身洗い処(福岡町) 昭和56年建立

18 泰澄大師像(福岡町) 昭和56年建立



16



17



18

福岡八幡神社拝殿北側の奉安堂には、奈良時代に白山を開いた泰澄大師の作と伝えられる聖観世音菩薩像が安置されており、昭和56年(1981)に根上町指定文化財になっています。伝承によると、明治35年(1902)の社殿新築の際、この木像の聖観世音菩薩像が掘り当てられ、手取川洪水によって白山麓の寺から流れ着いたものと伝えられています。

大師立像は、聖観世音菩薩ご開帳80年を記念して制作されたもので、安置されている場所から白山を望むことができます。(小川重喜著『聖観世音菩薩像』より)

19 福岡地蔵菩薩(福岡町)

大和(奈良)にある矢田寺から伝わったという地蔵尊です。矢田寺を開山した満米(まんべい)上人が冥途へ行き、鬼にいじめられている子どもたちを救う地蔵尊と出会い、生き返ってから生身の地蔵尊の姿を彫らせたといわれています。

各地のお地蔵様の多くは、右手に杖、左手に如意宝珠を持たれているスタイルなのですが、矢田寺のお地蔵尊は両手の親指と人差し指を結んだ独特のスタイルで「矢田型地蔵」と呼ばれています。この地蔵様も同じ姿です。



20 高坂地蔵(高坂・根上町) 平成2年建立

夜半に付近を通ると、必ずキツネに化かされるといわれたので、信心深い村人たちは相談し、石地蔵を安置した地蔵堂を建て、この地蔵堂の前を通るときは必ず拝むことにしました。それからは、キツネに化かされることがなく安全に往来することができるようになったと伝えられています。根上松古戦場沿いに安置された地蔵は霊峰白山を一望し遥拝できる絶景の地に位置し、高坂では、この地蔵にお参りすると長生きできると伝えられ、延命地蔵とも呼ばれて信仰を集めています。

根上松古戦場沿いに安置されていた地蔵は、霊峰白山を一望する絶景の地に位置していましたが、道路拡張に伴い、現在地に移設されました。



21 山道の地蔵像(寺井町)

22 山道の地蔵祠(寺井町)

山道の東にある地蔵堂は、末信への三差路で、夜道に提灯の火がここに来て消えることから、人々の難儀をみた区長安東宇兵衛が、半助お宮の地蔵尊をここに安置しました。



21



22



22

23 六体地蔵(佐野町)

佐野町の共同墓地の入口に、赤い「よだれかけ」を着けた六地蔵が立っています。以前は「さんまい」と呼んだ火葬場の前に立っていました。

お地蔵さんは、正式には「地蔵菩薩」であり、天界から地獄まで幅広く救済活動を行うとされています。特に子供との結びつき

が深く、仏教の世界では、親に先立って亡くなった子供の罪が深く、地獄に落ちてしまうとされています。そんな子どもたちを救うのがお地蔵さんなのです。赤は魔よけを意味します。



24 湯谷温泉の馬観音(湯谷町)

明治33年(1900)に今川間兵衛が、湯谷の山裾に鉱泉を発見しました。塩類泉として皮膚炎などに効果があるということで湯治客が多く来るようになり、今川旅館・北清旅館が営業していました。大正時代は賑わいましたが、戦後に廃業し、観音像は辰口出身の画家中川一郎氏の父の中川一雄氏の作品で、不動院という寺跡に建っています。

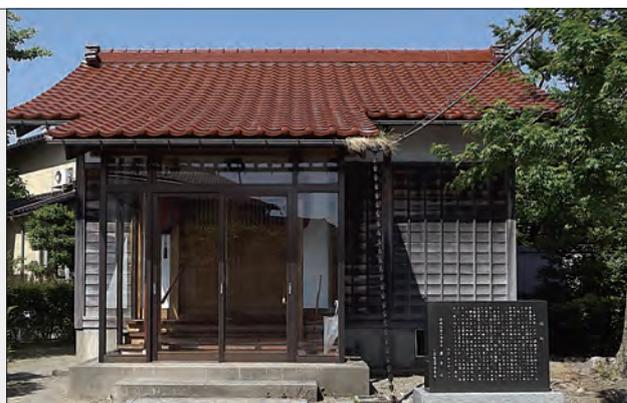


25 子宝観音(湯谷町) 昭和61年建立

昭和60年(1985)に東部丘陵地で豊富な湯量の温泉が掘削され、これを利用した老人福祉センター・特別養護老人ホーム・クアハウス九谷などが建設されました。温泉の質が良好で、子宝の授かる効果があるとされ、子孫繁栄を願って、子宝観音が建立されました。

26 聖観音堂(粟生町) 平成9年建立

粟生の人々は度重なる手取川の洪水に苦しんでいました。十村牧野孫三郎は復旧開拓のために仏の御慈悲にすがることを思い立ち、観音を祀りました。御堂には十一面観音が祀られています。村人から「開きの観音」と崇拝され、復興を成し遂げました。



27 粟生の地藏(粟生町)

観音堂の近くに地藏堂が建てられています。堂内中央に大きな石地藏が安置され、その左右に小さな石地藏40体程が安置されており、篤信の人のお参りが絶えません。

28 イボ神様・保寿泉碑(粟生町)

29 イボ神様薬師堂(粟生町)

粟生少彦名神社は古くから薬師宮といい、病気快癒の数々の伝説があります。耳鼻を病んだ弥七郎が、夢枕のお告げにより泉の水を洗飲したところ、治癒したとのことで、「保寿泉」と称されました。また、イボにも効能がある「イボ神様」とも親しまれてきました。



30 地持地蔵(三道山町)

寺井山古墳群の北方は、鶴来街道からの三つ角と呼ばれました。三道山・末寺・寺井の境が接するところで、集落に悪霊が入らないように通行人の安全を願って地蔵が辻に置かれました。この地蔵には「もの言う地蔵」という民話があります。

31 延命地蔵菩薩(辰口町) 延享2年(1745)建立

北陸随一の石仏坐像で、安置されている集福寺は梅鉢紋を使用する加賀藩ゆかりの寺院です。明治28年(1895)に金沢から伽藍と地蔵菩薩が移座し、地蔵菩薩は享保年間に江戸相撲の鬼来崎岩右衛門が、北陸巡業の勝利と念願の大関になったことを記念して、集福寺に奉納した石仏です。(能美市指定文化財)



32 石坂地蔵(金剛寺町) 平成元年建立

金剛寺から里に出るには、石坂・赤坂を越えなければなりません。危険が伴う坂越えに、明治初めに祠の地蔵が置かれ、安全を見守っていました。病気平癒の感謝として、雨ざらしだった地蔵のために銅板葺きの御堂が造られました。

33 石仏(大口町)

宮竹町から大口町に入り、左への道路を200mほど進んだ道端に石仏が安置されています。

昔、修行僧が大口～和佐谷道を通り、白山さんに向う途中で倒れて亡くなり、村をあげて供養したとのこと。

その後、坊さんが倒れていた近くに石仏を建て、お盆にお参りしていたとのこと。今でも時々お花を添え、お参りしている方々がいます。ちなみに、この林道は仏大寺・鍋谷・坪野を経て大口～和佐谷～白山比咩神社へとつながっています。



コラム「[日・月]の石の祠の謎」

日月の石の祠について『[日・月]の石の祠の分布と謎を考える』(谷本慎吾氏)によると

- ① 五穀豊穰を願い、また水に感謝して「しょうず」の涌く所に祀っていた。
- ② 屋敷神信仰の対象としての「日・月」の石の祠を祀っていた。
- ③ 「神明社」「神明さん」の場所が多い。
- ④ 八日神様とも言われている。

と述べておられます。「日・月」の祠は南加賀に多く分布していて、今回の調査でも辰口地区18町、寺井地区7町、根上地区4町から日月祠の報告がありました。

全国各地に鎮座する神明宮、神明神社は、伊勢神宮・内宮の天照大神と外宮の豊受大神を祀ったもので、「日」は天照大神、「月」は豊受大神を表わしているようです。

八日神様は「八日事始め」のように、仕事の取りかかりは八日という習慣と関連があるのかもしれませんが、農作業との関連で「豊穰」を祈る意味もあるようです。また川北町田子島・子浦神社の由緒に「境内にある八日神様は水火の禍の鎮護神として知られる」とあることから、竹蔵神社(北市町)の石祠も洪水から村を守るためだったのかもしれませんが。

34 小神様(新保町) 平成9年建立

新保には、八幡神社のほかに八幡社・白山社などがありましたが、明治40年(1907)に新保八幡神社に合祀されました。そのほか、村内にあった道祖神などを含め、神社の境内には小神様として祀られています。北国街道から白山本宮に詣でるには、下清水・三ツ屋・岩内・灯台笹などの川沿いと進み、岩本の渡しを越えなければならなかったため、安全を見守る道祖神でした。





35 川原神様祠(火釜町) 昭和54年建立

集落の北東を流れる宮竹用水の傍らの銀杏の下に「岩田ノ神明宮跡」と刻まれた小さな祠があります。安永2年(1773)の大洪水の際、流れてきた大岩が決壊箇所を塞ぎ、被害を最小限にとどめたという伝承が記された資料もあります。地元の人からは「かわらがんさま」と親しまれています。

36 水神様(荒屋町) 昭和21年移設

旧荒屋神社は、明治40年(1907)の神社合併により、徳久の山上郷八幡神社に合祀されました。現在の神社は、昭和21年(1946)に創建されたものです。この水神様は旧荒屋神社境内にあったものです。



37 水神様石祠(上清水町)

昔は村領のあちこちに清水(しょうず)が湧いていて、神社境内でも湧き水があり、大正8年(1919)頃、そこに堀が造られ、小さな仏像の祠が建てられていました。その清水は七ツ滝の水とつながっているとも言われていました。戦後、水が出なくなり埋められ、祠は小神様と並んで境内東の石垣の上に移されています。

38 竹蔵神社跡石祠(北市町)

竹蔵は北市の北方に、江戸中期まであった村です。場所は現在の東レ工場の敷地内にあたります。しばしば手取川の氾濫に悩まされ、天明年間(1781～1787)の洪水後、無人の村となりました。明治9年(1876)に北市村に合併され、北市神社の小神様の近くにある祠は、元は竹蔵の神社のものという言い伝えがあります。この祠には珍しく「八」の字の形の紋様が彫られてあり、これは「八日神(事始めの神)」のしるしとされています。



39 神明神社跡地(和気町)

昭和28年(1953)に耕地整理が実施された時、縄文中期の土器が数多く出土し、付近からも弥生時代の石器類が出土しました。その他、水田の畦で五輪塔や石造物片が残っていたとされ、神社に関係する場所と思われます。



40 日月祠(古宮跡) (和気町)

月夜見神社ともいわれ、明治42年(1909)頃まで存在し、明治45年(1912)、上和気、中和気、下和気の各神社を合祀した際、神明様の祠を境内に移したものです。現在も神明祭りが行われています。これも日月の文様が彫られています。



41 狐塚(寺井町)

42 狐の陶板(三道山町) 平成元年建立

寺井地方に「狐の物語」があります。百姓久兵衛が老婆に化けた女狐を捕らえ、これを殺そうとした時、即得寺の住職が来て助命を願い、助けることにしました。ところが、住職も三道山の男狐だったのです。翌朝、即得寺の専応住職の許に老狐夫婦が来て、袈裟衣を無断拝借したお詫びに「火避けの刀」を収めました。住職は老狐を境内に住ませ、死後は埋葬し狐塚としたそうです。



41



42

43 七重塔(寺井町)

七重塔は奥野八幡神社境内にあり、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に、前田家家臣が持ち帰った説や、加藤清正が持ち帰り前田家に贈呈した説が伝わっています。初めは兼六園に設置されていました。前田利常が小松に移る際に持参し、明治維新後に寺井の住民に払い下げられたとされています。

なお、この塔の一部は小松城内に残されているという説もあります。

